

松下国際財団 研究助成

研究報告

【氏名】

高槻泰郎

【所属大学院】(助成決定時)

東京大学大学院経済学研究科 博士課程

【研究題目】

近世・近代市場機構の形成過程—価格形成と経済主体の投資行動

【研究の目的】

本研究の目的は、我が国において、市場における価格形成を支える制度が、いつ、いかにして形成され、それが当時の経済主体の行動にいかなる影響を与えていたのか、という点について明らかにすることにある。この点について実証する上では、市場経済の創成期を観察することが好適である。価格機構が形成されていく過程にこそ、適正な価格形成が行われるために必要な条件、並びに経済主体の行動変化が示されると考えるならば、市場経済の胎動期たる徳川時代、並びにその勃興期たる近代初期を事例にとって検証を行うことが、最も望ましいということになる。

本研究では、徳川時代の米市場において実際に取引活動を行っていた経済主体の行動を厳密に実証すること、そして近世期の米取引制度が、近代的な取引市場へと引き継がれていく過程を実証することを通じて、我が国の市場経済の勃興過程を記述することを課題とする。

【研究の内容・方法】

本研究の具体的な作業課題は、大きく二つに分かれる。第一に、大坂米市場における取引の安全性を担保した仕組みを解明すること、第二に、米価という情報が、当時の社会においていかにして伝達され、共有されたのかを解明すること、の2点である。

第一の点について、本研究が着目したのは、諸大名が大坂において発行した米切手という証券である。諸大名は貢租として収集した米を船で大坂に運び、各自が所有していた蔵屋敷という倉庫に納入した。米は入札で米仲買に払い下げられるが、この時、落札した米仲買には米俵ではなく、1枚当たり10石の米との兌換を約束する米切手が発行された。本来ならば、米切手の発行残高と、蔵にある米の量は1対1で対応していなければならなかったが、米切手を受け取った米仲買が、実際に蔵出しを請求するまでに時間差があったことを利用して、諸大名は蔵米在庫量以上に米切手を発行することを常としていた。ここで問われるべきは、仮に米切手の提示に対して、蔵米との兌換に応じられなかった場合に、市場はどのように対応したのか、という点である。実際に不渡りを出した筑後藩(有馬家)に着目することで、この点を分析することが第一の実証課題となる。

第二の点について本研究は、大坂と大津という隣接した2つの米市場間で、米価がどのように伝達されていたのかという点に着目した。従来、大坂を中心に西日本各地の米価が正の相関関係にあったことは指摘されてきたが、これは年次、あるいは月次といった頻度での観察結果であり、実際にどの程度の速度で、大坂米価が各地に伝送されていたのか、という点は解明されてこなかった。そこで、本研究では、日次の米価系列が復元可能な、大坂と大津という2つの米市場を素材にして、両市場の価格連関を計量的に分析することにした。具体的には、VAR(Vector Auto Regression)モデルを用いて、両市場米価の先行遅行関係、及びそのラグを検出する作業を行った。

【結論・考察】

第一の点について、幕府が提供した司法サービスが、米切手の安全性、ひいては大坂米市場における取引の安全性を究極的に担保していたことが明らかになった。米切手の不渡りが頻発する事態を受け、幕府は1761年に空米切手停止令と呼ばれる法令を発し、米切手の提示に対しては、確実に蔵米との兌換で応じることを諸大名に義務付けた。筑後藩が米切手について不渡りを出した際に、米切手所持人は、大坂町奉行所に出訴し、わずか20日で債権の保全が図られていたことも明らかになった。

第二の点について、1840年以前は、大津市場は大坂市場に対して1日遅れで追随する関係にあったことが明らかになった。この段階では、相場情報の伝達を担ったのは飛脚であり、大津市場では、毎朝届けられる、昨日の大坂相場を元にして取引を行っていたため、1日遅れで追随していたのである。一方、1840年以降になると、両市場の先行遅行関係が消え、両市場の米価が同じ営業日中に連動するようになっていた。これは、相場情報の伝達手段が、飛脚から旗振り通信へと変化したことによる。大津市場が大坂相場を反映するのに、もはや1営業日すら必要としない程度に、速やかな連関が実現していたのである。